

更級への旅

雨がしずくになって空から落ちるには水分が集まるその核が必要のように、当地が姨捨説話のメッカとなっていく上で核になったものは何か。さらしな里歴史資料館の説を構築した森嶋稔先生（右の写真）は、それを今から約千二百年余り前の七九七年に編纂された「続日本紀」記載の次のエピソードだと、お考えだったようです。

▽名誉な記事

信濃国更級郡人建部大垣

為人恭順、事親有孝

神護景雲二年（七六八）

五月辛末の項

続日本紀は朝廷に関係した歴史を今で言えば年表のように時代順に記したもので、七六八年の歴史的な事実として「信濃国更級郡の人建部大垣は、その人となりは恭順であつて、親に仕えて孝行であつた」と記しているのです。そしてその後、孝行ぶりを讃え、税金を免除したという記述が続いています

この記事が盛り込まれた年代が重要です。七六八年は八世紀です。下記の年表をご覧ください。棄老国縁に続く日本側の更級に関する歴史的な文字資料としては最古、つまり最初のものと思われる

孝行の建部大垣になった核

天皇家の公文書に更級の親孝行者のことが紹介されている。当地の人にとっては名誉なことだったでしょう。森嶋先生は論文「姨捨山の周辺」の中で、この更級の里に昔親孝行な息子があつて、お上からとてもほめられたことがあつたという記述は「更級郡の人々に多年伝承されるにふさわしい事件ではなかったか」と推測しています。その上で「それは姨捨説話を生み出す土壌であつたと考えて間違いない。きつと月と親孝行な息子と仏教的世界観とが三重うっしの影絵のようになつ

て、この説話がこの地に根づいたのではないだろうか」と分析しています。

なるほど、仏教の教えが広まり始めたところに、親孝行の息子がいる地として

冠着山が姨捨山でもある訳（下）

て天皇家からほめられた。そして旅の途上では、美しい月にお目にかかれる—姨捨伝説のメッカに、ここが選ばれたわけがかなり煮詰まってきました。もう一息です。

▽オハツセと墓所思想

古代に更級郡（さらしなごおり）と呼ばれていた地域は広くあります。し

六世紀初め	仏教伝来 棄老国縁も広まる
七六八	続日本紀に建部大垣 小野小町の歌（あやし くも慰めがたき心かな 姨捨山の月も見なく に）
八八〇 ごろ	古今和歌集（わが心慰 めかねつ更級や姨捨山 に照る月を見て）
九〇五	大和物語
九五― 九九八	拾遺和歌集（月影はあ かず見るとも更級の山 のふもとに長居すな 君）
一〇五九	更級日記

東山道が「姨捨」を文学に



です。確かに塩崎地区（旧更級郡塩崎村現長野市）には、長谷寺（はせでら）という古刹があります。だからなのでしょう。このお寺の後背地にあたる山がはるか昔は「オハツセ山」と呼ばれていたとも言われています。いや、

オハツセ山の呼び名が先にあつて、長谷寺が後に建立されたと考えることもできます。また、この辺りには、前回三十三回目で触れた東山道の支道沿いで旅人が往來していました。

▽名づけ親は旅人

とすると、この山が「姨捨山」と呼ばれているのかもしれないませんが、この山は登るのにさほど大変ではないようです。身近な山ではなかったでしょうか。一方、長谷寺から少し離れていますが、威容を呈す冠着山。ふだんの生活を離れ、自分なりの物語をつくりたい気持ちに駆られる旅人にとつ

ては、冠着山を姨捨山と呼ぶ方が気分的にぴったりきたのではないのでしょうか。

左の写真は荒井君江さんが長谷寺の背後にある猪平地区から冠着山を撮影したものです。遠くから見ると、冠着山の山頂、山腹、そしてその麓に、別世界を想像しても不思議ではないのでしょうか。荒井さんは塩崎のお生まれで、幼少のころはお母さんから「あの山のとつぺんには神さんがおいなさる」と教えられていたそうです。

また、旅人は地元の人間より遠方から冠着山を見るチャンスにずっと恵まれていたはず。やはり、姨捨山の名づけ親は古代の旅人と考えた方が腑に落ちます。旅での見聞や知人友人のみやげ話にロマンを感じた今で言う作家たちが「大和物語」や「更級日記」「今昔物語集」を書いたと言っているのではないのでしょうか。

▽情報の道

実は、森嶋先生が六十六歳で亡くなる直前に書いた別の論文「をばつせ山」（さらしな里歴史資料館の紀要第一号）の末尾にある東山道についての次の記述が冠着が姨捨山の別名を持つなぞを解く一番のヒントでした。

—越後国への東山道の支道が（さらしな里を）通過しているのは、姨捨伝説が成立し、流布するのに大きな貢献をしたものと受け取れる。情報の伝達は、知識人である貴人や官人の往来にあやかっていたと認めるべきである。もしそこに官道がなかったら、八世紀後半という早い時期に語られようはずがなかったように思われる—

東山道はいわゆる「情報の道」でもあつたのです。

二回にわたって書いてきたことを要約、総括してみます。仏教的世界観に親月の名所、親孝行息子の実在。また、死者を葬る場所「オハツセ」の近在、さらに冠着山の威容。そして、それらを融合し、和歌や物語集といった文学に昇華させる回路としての東山道の支道。これだけの条件がそろえば、冠着山を姨捨山と呼ぶにはいられなかったでしょう。

森嶋先生のお写真は、竹内長生さんのお書きになった「とぐら郷土の人物伝」から複写しました。

発行 二〇〇六年 四月三十日

編集 さらしな堂

（代表・大谷善邦）



〒三八九・〇八一三

長野県千曲市大字若宮二一八四・六

（旧更級郡更級村）

